

いつか私が満洲に旅した時のこと、それは夏であったが、ひろい野を横ぎって、立ち並んでゐる電柱に鷹がとまつてゐた。こんな風景は日本では珍らしいが、満洲ではよく見ることである。

私はこの鷹の句を作つて発表した、さうしたらある人は夏に冬の季題の句を作つてゐる——と言つて、非難し、同時に季題といふものの缺陷を論じたのであった。私は季題といふもののかうした缺陷は認めるが、夏に冬の季節の句を作つて悪いといふことには全く賛成出来ないで、私は駁論を書いたのであった。

作品を作る時は、どこまでもモチーフを重んじたい、ものに對して感動して、詩が生れるのであるから、その心が大切なので、決して季題に使はれてはいけない、こつちが季題を使ふのである。

一つの感動が一句を成さしめようとしてゐる時、ここでどういふ季題を使ったら最も効果が擧るか——このことはモチーフの次に重要なことで、季題の選擇とその用ゐる方に就ての技巧的努力が拂はれなければならぬ。

夏に冬の季題の鷹を詠む必要が起つたら、どしどし詠んだらよい、要は出來た作品の問題で、よい作品ならすこしも支障ない。

夏の野に鷹が飛んでゐたら、そのやうに詠んだらよい、たださういふことはむづかしい、それは鷹といふ冬の季感をもつてゐるものと、夏の野とが正蔽衝突をする、そしてそれがもし不成功の作品なら、鑑賞者の方でも何かちぐはぐなものを感ずるであらう。

實際、夏の野に鷹が飛んでゐたのだから、これはたとへ珍らしい事象にしる、事實である、而もそれは満洲といふ地域である、さういふ特殊事情のもとに於て起つてゐる現象である、作られた俳句に於てもさういふことが裏づけになつてゐなければならぬ、その裏づけが充分であるならば夏野に於ける鷹も何等矛盾なく讀者に感銘を與へるであらう。

すこし初學者には難かしい議論になつたが、どうせ最後にはかういふ問題にぶつかることだから、かまはないでせう。